鶴田町議会常任委員会

平成27年度合同視察研修報告

視察先　島根県海士（あまちょう）町
日　程　平成27年8月26日（水）～28日（金）
参加者　【総務経済】一戸豊、太田良一、神秀次郎、下山勝明、出町豊
【教育民生】澁谷光正、小関優、松山明、三浦勉、新谷賢剛

今年度の研修は、総務経済常任委員会と教育民生常任委員会が合同で実施し、島根県海士町で「地域資源を活かした活性化策について」、「高校魅力化プロジェクト」をそれぞれ視察および研修してきましたので、その概要についてご報告いたします。

海士町は、日本海の島根半島の沖合およそ60キロにある隠岐諸島に位置し、隠岐の島を「島後」、中ノ島、西ノ島、知夫理島の3つで「島前」といい、海士町は中ノ島に位置しています。

海士町の特徴は、名水百選に選ばれた「天川の水」という豊富な湧き水があり、平らな土地が多く、離島では珍しく田んぼが多い島です。豊かな田んぼと海に囲まれた立地で海産物に恵まれており、半農半漁で栄えてきた島です。

海士町は、昭和25年（1950年）には7千人近くいた人口が、平成22年には2374人に右肩下がりで減少した、いわゆる過疎地域で、人口ピラミッドでも20代から30代の層がごっそり抜け落ち、高齢化率も39％、年に生まれる子どもの数も10人前後となっていました。

近年、Iターンが多い島として取り上げられ、このごっそり抜け落ちた世代の20代、30代が多く移住、人口の推移も少しづつ横ばいになってきている現状です。現在は、高齢化率38％、年に生まれる子どもの数も15人～16人と増えています。

海士町の財政は、もともと港湾や道路の整備など公共事業中心の島でした。

平成15年の三位一体の改革で地方交付税が減少、一気に町の基金も底をつき始めて、当時（平成15年）の試算によると、平成20年には財政再建団体に陥ってしまうことが予測されていました。

平成14年に現在の山内町長が就任。海士町で初めて政策で選ばれた町長だといわれています。時を同じくして、平成の大合併の流れがあり、海士町も例外でなく合併の流れがありました。島前3島が合併の対象であり、島同士では合併のメリットが出にくいということもあり、激しい議論の末、単独町制を選択することとなりました。そこで「自立・挑戦・交流」の3つのスローガンに攻めの戦略、守りの戦略と2つの戦略を立てて、この状況に挑んでいくことになったということです。

守りの戦略というのが、町長が自ら給与を50％カット。それに続く形で副町長、教育長、議員、職員と自主カットの申し出がありました。同様に住民からも自分たちにできることはないか、などの声が上がり、老人クラブからバス料金の値上げや補助金の返上、各種委員から日当減額の申し出があったそうです。人件費削減等で2億円財源を浮かせることができたということでした。

現在は、職員の給与は元に戻し、町長だけは30％のカットは続けています。

その身を切って浮かした財源により、新しい政策として「海士町子育て支援条例」を制定。内容の主なものは、海士町で結婚したカップルには1組につき5万円、そのカップルに子どもが生まれたら1人目、10万円。2人目、20万円。3人目、50万円。4人目以降100万円という助成金の支給、保育料は第3子以降無料といった内容です。

産業振興を柱とした攻めの戦略では、海士町役場の交流促進課と産業創出課、地産地商課の3つの課を町の玄関でアンテナショップでもある「キンニャモニャセンター」内に事務所を設置し、365日体制で窓口に必ず誰かがいる体制をつくりました。そこは、お客様のニーズをキャッチする場となっています。

また、海士町では、商品開発研修生制度があり、平成10年から研修生を受け入れています。その制度とは、島の外から若い人が来て、島の宝を見つける、見つけてほしい、ということで、町が雇用して1年後に何か商品を開発してもらう制度です。

それにより、第1弾が「島では常識サザエカレー」という商品が出来上がりました。島でカレーを食べるにあたり、サザエをカレーに入れて食べているのを見て、当時の研修生がそれを商品にしようと考えました。それが見事にヒットして、外の人

海士町

研修中の様子

の視点を入れるだけで、自分たちが当たり前と思っていた物がこんなにも魅力的に映る商品となることが、海士町で一番最初に認識された商品でした。

第2弾が、岩がきの養殖で、昼食時に食べた「春香」と名前がつけられている岩がきでした。こちらも東京でサラリーマンをしていた方がIターンをして、地元で漁師をしている方とタッグを組んでブランド化に成功しています。それは、評価の厳しい築地市場に持っていき、きちんと評価を得ることで全国に広めていくという取り組みから始めたということです。築地市場に出荷するためにトレーサビリティを徹底して、そうしたものしか出荷しないようにしております。現在、ここ10年ほどで、当初出荷していた数の6倍、約30万個ほどの岩がきを出荷しています。

次に海士町では、イカの中でも値段が張る白イカ、ケンサキイカが秋になるとたくさん捕れます。ただ、白イカを捕っても一番近い港が境港しかなく朝イカを釣って、持っていけば昼になってしまいます。そうなると競りにかけられるのが次の日になってしまい、鮮度も落ちて値段も買いたたかれていました。このままでは、島の漁業も頭打ちになってしまう。その問題を解決できないかと取り入れられたのが、CAS（Cells Alive System）という特殊な冷凍技術でした。基本的に冷凍すると細胞壁が壊れてしまって鮮度が落ちてしまう。CASという技術を使って冷凍すると電磁波を使って振るわせながら冷凍すれば細胞が壊れないで新鮮なまま食べることができるという技術です。これを一番最初に取り入れたのが、海士町といわれています。CASを取り入れたことにより、旬ではない時期に旬の物を取り入れることができて、漁師の収入アップにつながっています。

島前高校魅力化プロジェクトについて、なぜ県立の高校に町が関わるのか。海士町にある島根県立隠岐島前高校は島前3島で唯一の高校で、少子化の影響で約10年間で入学者が減少。島根県では1学級21人以下になると統廃合の対象になってしまうということで、島前高校にも統廃合の危機が迫っていました。高校がなくなると、高校卒業と同時に減少する傾向にある人口が、中学校卒業と同時に出て行ってしまう。そして、仕送りで出ていく島からのお金もそれと同時に出ていってしまう。もっとひどい場合は、家族ごと出て行ってしまう。高校を存続させることは、島を存続させることにもなる。そういう危機感のもと、このプロジェクトが立ち上がったそうです。具体的には、最大の特徴として「地域創造コース」を創設し、授業の中で、この島にどんな課題があるのか、実際に自分たちで現場に出て行って、それをどう解決すれば良いのか、高校生が考える授業を行っています。島の現場に出て行き、島の大人たちがどういう仕事をしているのか。地域のことを深く知り、考え、地域の課題を解決する授業ということであります。

それから、もう一つの特徴として、大学に進学するためのコースをつくったことです。少人数制を利用して、個人にあった指導を進めて学力をサポートしようというのが「特別進学コース」です。実績として、国立大学の入学者が毎年増えてきており、特に島から一番近い島根大学の進学者数が増えてきており、慶応大学や早稲田大学に進学する生徒も増えてきているそうです。またもう一つの特徴として、学校だけでなく、塾も町でやっています。公立の塾として、隠岐国学習センターを立ち上げています。そういった取り組みも含めて島の外から生徒を呼び込む「島留学」という制度を立ち上げています。「この自然に恵まれた環境で勉強しませんか、大学に行くためのカリキュラムが揃っています」ということで、「島留学」制度では全国から生徒を集めています。そうした努力の結果、統廃合寸前だったところから、持ち直して、昨年から3つの学年とも2学級ずつになり、その半分ほどは島外から来ているそうです。

最後に今回、海士町の研修で説明してくれた方は、芦原昇平さんというIターンで海士町に来られた方でした。彼は、佐賀県から石川県の大学に進み、地域創造学を学び、卒業論文でこの島を取り上げたのがきっかけで、昨年、海士町の観光協会の「島のマルチワーカー制度（春には岩がきの養殖場、夏にはホテル、秋にはCAS凍結センター、冬にはナマコ加工場と季節ごとに組み合わせていくことで雇用される）」という形で1年間、移住された方です。このマルチワーカーを1年間やったおかげで、海士町のこれまでやってきたプロジェクトや産業振興について説明ができると話されていました。今年は、新しいプロジェクトを立ち上げてみないかという声がかかり、海士町役場の交流促進課の臨時職員として仕事をされています。

芦原さんは最後にこのようなことを言っていました。

「ないものはない」というポスターがたくさん貼ってあったと思います。これには込められた思いが2つあるそうです。この島にはコンビニなど便利なものは一つもない。この島には便利なものはなくて良い。ないものはないと言い切ってしまう姿勢。しかし、生きるために必要な物はこの島にはすべて揃ってる。それがこの島に「ないものはない」という想いが込められた2つのパスワードとなっているそうです。

ないものはない
隠岐國
海士町

◁「ないものはない」ロゴマーク